加奈子（上）

小山内 美江子

小山内美江子（おさないみえこ）　本名・笹平美江子。1930年横浜市生れ。47年鶴見高等女学校卒業。51年東京スクリプター協会員となり，独立プロ「真空地帯」「日の果て」などの映画製作に参加。
62年テレビ指定席「残りの幸福」（NHK）のシナリオ執筆以来，シナリオライターとして「七人の刑事」（TBS）「さむらい」（NET）「火曜日の女」（NTV）「アイフル大作戦」（TBS）「アンラコロの歌」（TBS）など数多くの作品を発表，活躍している。日本シナリオ作家協会会員。

加奈子（上）

昭和五十年十二月一日　初版発行
昭和五十一年　　初版第二刷発行

著者　小山内　美江子
発行者　根本　峰好
発行所　株式会社　旺文社
東京都新宿区横寺町五五
郵便番号一六二
電話　東京（〇三）二六七―一一一一
印刷所　旺文社専属　日新印刷株式会社

落丁・乱丁・不良本はお取り替えします。本社に直接お申し出ください。
※定価はカバーに表示してあります。

0093 | 59003 | 0724
（許可なしに転載・複製することを禁じます）
© 小山内美江子　1975
601129　Printed in Japan
（中村印刷・穴口製本）

加奈子（上）

小山内美江子

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

第一章　言葉を失った　7
第二章　出逢い　28
第三章　家出行　54
第四章　婿取り　76
第五章　再会　99
第六章　愛と死　124
第七章　決意　149

第八章　出生の秘密　174
第九章　嫉妬（しっと）の火　194
第十章　疑惑　217
第十一章　下町の人情　242
第十二章　生きる　265
第十三章　折鶴　291

装丁　大野隆也

第一章　言葉を失った

美濃道は、全山燃え立つような紅葉であった。尾張・美濃から、越前・加賀へ通じる道は、昔から美濃道と呼ばれ、そのほぼ中央に油坂峠がある。油坂から南へは長良川が流れ、北へは九頭竜の荒々しい流れが、渓谷を造って日本海へそそいでいた。峠は雪になると翌春まで道は閉ざされ、この峠を越す旅人達は、ふり返る美濃の空は青く、行く手北陸の空は暗いと、北国の厳しさを言い表していた。

その美濃道を、今しも一台の荷馬車が轍（わだち）の音を響かせていた。馬車の荷台の尻には篠田加奈子とばあやのハナが揺られていた。

加奈子は、岐阜の和傘問屋、篠屋の一人娘で、今年十七になる。

大正十一年の秋のことである。

彼女の生家、篠屋は、全国的恐慌のあおりで倒産した。加奈子の父、幸蔵は、知人の借金の保証人となり、判を押したばかりに、九代続いた篠屋を人手に渡してしまったのである。幸蔵はそのショックで病を得、加奈子を遠縁に当たる越前大野の西岡家へ預けることに決めた。万

一の場合を考慮し、一人立ち出来るように娘の将来を考えた処置だったのである。
もちろん、加奈子は哀願した。女学校も止める、どんな賃仕事でもして働くから、傍に置いてほしいと。しかし幸蔵は聞き入れなかった。一旦決めたことは変えない人であった。
加奈子は幼い時に母を亡くし、ばあやのハナに育てられた。その母親代わりのハナとも、越前大野に着けば別れなくてはならない。他国の秋風が身に泌みる長い辛い旅であった。
小さな佗びしい岐阜の病院で敗残の身を横たえている父を思うと、切なさにともすると滅入りそうな気持ちを引き立て、加奈子は強いて明るくハナに語りかけるのであった。しかしハナは四つに畳んだ手拭いで目頭を押え続けていた。お嬢さんを大野へお連れしますと、幸蔵に言い切ったものの、ハナは悔んでいた。
「今までとは、何もかも違うんだから、働かせてもらう私が、ばあやをそばに置くわけにはいかんでしょう」
「めっそうもない。二十人も奉公人を使っていた篠屋のお嬢はんが、働かせてもらうなんて」
ハナの瞼に浮かぶのは、干してある傘の間をとびはねていた可憐な加奈子の姿であった。そのお嬢さんが奉公なさる……せめて自分がそばにいて面倒をみられればと、かき口説いたが、加奈子は健気にも、きっぱりと断った。
「お嬢はん……」
何も力になれない自分がせつなくてハナは泣いた。加奈子が不憫すぎた。
「駄目ねえ、岐阜を出てから泣いてばかり。この分では大野に着くまでに、ばあやの目々はとけてのうなってしまうわよ」

ハナの気持ちを引き立てようと、加奈子はからかいながら、慰めていた。

「ばあやは早よう亡くなったお母はんの代わりだと思っているの。いつまでも達者でいてね。毎晩、いつもの煎じ薬を、ちゃんと忘れんでね」

しんみりした加奈子の優しい言葉に、ハナは耐えられず、とうとう声を上げて泣き出してしまっていた。

荷馬車で勝原まで来ると、そこに花木屋から出迎え人として、中番頭の治助が来ていた。馬方の定吉とはここで別れなければならない。定吉は、明日またここで待っているからと、ハナに言い置いて、去って行った。

加奈子の荷物を無言で肩に担ぎ上げた治助は、先に立ってスタスタと歩いていた。口数が少なく不愛想な感じだが、根は意外と親切者なのである。

山の暮れるのは早い。年寄り連れの女の足を思うと、治助はあせっていた。

「雪になるといけん」

治助の呟きに、加奈子は一瞬、聞き違いかと思った。十一月早々に雪が降るとは——。岐阜育ちの加奈子には想像の出来ないことであった。

大野は雪国である。十二月には根雪になり、軒先まで積もり、春までとけないという。

これからの厳しい見知らぬ土地での生活を考えると、加奈子は胸がふさがる思いであった。

福井県、越前大野にある加奈子の落ち着き先き西岡家は、屋号を花木屋という造り酒屋である。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

大野は、米どころであり、澄んだ水が豊富なので、酒造りが盛んな所である。地主達が運び込まれた小作米によって酒を造っていた。花木屋のあるじ、徳太郎もその旦那衆の一人である。今日も山と積まれた小作米が運び込まれ、店は活気に満ち溢れていた。

この家の一人娘弥生は、学校を早引けまでして、従妹である加奈子の到着を待ち佗びていた。加奈子と同い年の十七で、大野の女学校に通っていた。加奈子とは、小学校五年の時、父徳太郎に連れられ、名古屋見物の時に会って以来の、五年ぶりの再会であった。

夜になってやっと到着を知らせる太吉の声がした。

「美濃のお客はんが、おいなはりましたァ！」

待ちに待った弥生は、はじかれたようにとび出すと、店では祝儀の振舞い酒に酔った小作人達にからまれた加奈子が、怯えて足をすくませていた。

「加奈ちゃん！　待ってたんよ、うち。遅いんやもの心配してたんよ」

かき抱くような弥生の温かい出迎えを受けた加奈子ではあったが、その体には異常な重圧感が負いかぶさっていた。

ハナのばか丁寧な挨拶がすむと、緊張で体を固くしている加奈子に、その固さをときほぐすように優しく徳太郎が問いかけた。

「ほれで加奈ちゃん、お父はんの塩梅(あんばい)はどんな具合やね」

加奈子は、〈はい〉と答えた。だが、その答えは声にならなかった。

「どうしたんや？」

加奈子から異変を感じた徳太郎の顔から、笑いが消えた。

「加奈ちゃん！」
弥生は、悲鳴に近い叫び声を上げていた。
ハナも愕然とした。涙をいっぱいためた目で、加奈子が唇を震わせ、激しくハナに首を振っている。
「お嬢はん！　あんたいったい……」
……声が！　言葉が出ないの！　と加奈子は懸命に訴えながらハナの膝を揺さぶった。
「お、お嬢はん……」
ハナの驚きの大きさに、加奈子は顔を覆ってわっと泣き伏したが、その泣き声も、声にならず、ただ大粒の涙が指の間から、こぼれ落ちるだけであった。

夜半だったが、急遽呼ばれた医者は、「失語症」という珍しい病気であると診断した。加奈子は極度の緊張のあまり、言葉を失ってしまったのである。
「いや儂らもびっくりしたが、ほんまに魂消とるのは、この加奈ちゃんの方や、ほうやろ？」
加奈子は、自分の気持ちを言い当てた徳太郎に、懸命にうなずいた。
「薬はただ一つ、気を楽にすることやてよ」
徳太郎の妻きぬは、いたわりを込めて、医者の言葉を伝えた。
「ま、加奈ちゃんも、辛いことがいろいろと続いたでのう。当分はゆっくり気を休めることや」
「今日からここはあんたの家やと思うて、心配ごとは何でも相談してくんねへん」

夫婦のかわるがわるのいたわりの言葉に、加奈子はただ頭を下げるしか術がなかったのである。

加奈子と二人っきりになると、ハナはさっそく真偽の程を問いただした。

「ここならだあれもおりません。ばあやにだけは本当のことを教えてくだっせえ」

加奈子が美濃へ帰りたい一心で、芝居をうっているのではないかと、ハナは思ったのである。道中、あれ程自分のことを労ってくれた気丈な加奈子ではあっても、やはりお嬢さん育ちの身には辛さがたえられないのであろうと想像もしたのである。

しかし、涙をいっぱいためた加奈子が、ハナの手を握りしめ首を振った時、ハナは現実を認めざるを得なかったのである。

「ああ、何てことやろ、一体どうしてこんな……」

何の因果でこんなことに……　旦那様も、お嬢様も立派な人達なのに……　握りしめた加奈子の手を知らず知らずのうちに激しく揺さぶっては、泣いていた。

気を取り直したハナは、背をさすれば、つかえ物は下りるに違いないと、加奈子の背に回り、神仏に念じながら、せっせと背をさすった。加奈子はそんなハナの真剣さにうたれ、また新たな涙を流すのであった。

「泣いとる場合じゃねえ。息を吸ってみんしゃい、大きく息を！」

加奈子はしゃくり上げながら、ハナに言われた通り懸命に息を吸おうと努力した。しかし声にならないしゃくり上げだけが、大きくなっていくのであった。

翌朝、突然の不幸の中にありながらも、自分を取り戻した加奈子は、約束通り一晩だけでハナを岐阜へ帰すことにした。

加奈子の病状の落ち着くまで留まり面倒を見たいという願いを加奈子に断られたハナはしょんぼりとして台所に座り込んでいた。台所の主キン婆あさんは、そんなハナの心の内を思いやると、声をかけるのもはばかられ黙って弁当包みを渡した。ハナはお嬢様をよろしくとキンに深深と頭を下げ、加奈子の面倒を頼むのであった。

乳白色の朝もやの中を、加奈子はハナを町端れまで見送った。

ハナは、加奈子をこのまま連れて帰りたかった。お嬢さんの一人くらい傘張りの賃仕事なり何をしてでも、養って見せる——。加奈子とて帰りたい気持ちは同じであった。このあといつばあやに会えるだろう……。一緒に帰ると叫びたい心を抑えて、一晩で小さくなったハナの顔を胸に刻みつけるように見つめた。だが溢れ出る涙は、その顔すらぼやけて見せていた。

ハナは後ろ髪をひかれる思いで背を向けた。追いたい心を抑え、朝もやの中に消えていくハナを、唇を噛みしめ加奈子は見送った。

辛い、悲しい別れであった。

ばあやが帰ったあと、加奈子は自ら進んでツシと呼ばれる屋根裏の女中部屋に移ることにした。

小僧の太吉が行李を運んで手伝ってくれた。女中のおマツとおキン婆あさんの隣の部屋である。太吉は、おキンばばの鼾がうるさくて眠れないかも知れないヨと、往復鼾の真似をして、加奈子を笑わせ、少しでも加奈子の気持ちをやわらげようと努めた。加奈子の健気な気持ちに

同情したからである。
だが、女学校から帰ってきた弥生が、加奈子がツシに移ったと知ると、徳太郎ときぬに食ってかかった。
「あんまりやわ！　加奈ちゃんとは姉妹と思って暮しなさいといったのは、お父ちゃんやろ。お母はんも嫌いや、加奈ちゃんは、ねえやでのうて、うちの又々従妹でしょう」
「責めなんな、お母はんも加奈ちゃんには、ほう言ったんやけど……」
きぬは、そばにいる加奈子を気にして口ごもったが、徳太郎は加奈子の意見でそうしたのだと話した。「本人の好きに過ごさせるように」との医者の進言に従ったのである。
「ほれにのう、加奈ちゃんも下働きを手伝って、入院してはるお父はんに、少しでもええもんを送ってやりたいといったでのう」
「うそ！　口の利けない加奈ちゃんが、どうしてそんなこと言ったのね」
「ええ加減にしんさい！　口は利けんでも、字は書けるでのう」
思わぬ家族の言い争いに、加奈子は、小さく肩落とす思いであった。
自分のために　両親に口答えまでしてかばってくれた弥生の温かい行為は、涙が出る程嬉しかったが、やはり決心通り、その夜から屋根裏のツシに寝ることにしたのである。
隣のキンの鼾を聞きながら床に入った加奈子の上に、どっと侘しさがのしかかってきた。お父様は今頃お休みかしら、ばあやはどの辺を歩いているかしら――　眠れぬまま、反転をくり返していたが、何時の間にか寝入っていた。過ぎし日の岐阜での幸せだった日々の夢でも見ているのであろうか、あどけない顔をして、目尻には涙を光らせていた。

翌朝早く目覚めた加奈子は、前垂れを掛け、襷をきりりと締め、台所に立った。

キンは、女中のマツより早く起きた彼女に目を丸くしたが、「手伝う」と手真似でいう加奈子に、目を細めた。

「よしよし、このばばがめしたきを教えてやる。薪が燃えたら、始めチョロチョロ、なかパッパ、やや児泣くともふたとるな、いうてな、こう吹くんや」

教えられた通り、懸命になって吹く加奈子に、キンはどうやら好意を感じたらしい。

やがて寝坊すけのマツも、主婦のきぬも起きてきた。

「加奈ちゃん……」

娘と同い年の襷がけの加奈子の姿に、きぬは胸突かれる思いであったが、明るくきちんと頭を下げる加奈子に、ほっとすると共にいじらしさを感じていた。

大野名物の一つ朝市に、きぬは加奈子を連れて出かけた。加奈子には物珍しい風物で、市は賑っていた。町ばの人達の台所を賄う朝市は、近在の百姓衆が道端に荷を広げて商いをしている。女達の社交場の一つでもあった。朝の挨拶を交わし、一日はこの朝市から始まるのである。加奈子も　きぬから知り人に紹介されたりして買い物を覚えていった。

女達の場はもう一つある。御清水である。水底の小岩まで、キラキラと水に透いてみえる清らかな湧き水の洗い場で、野菜洗いや洗濯など、洗い物の一切を洗っていた。浄、不浄の区分けがあり、品物によって女達はあっちへ行って洗ったり、こっちへ戻って洗ったりして、手と口をせわしなく動かしていた。お喋りのマツの隣で加奈子もせっせと手を動かしていた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.